

# 働く社会調査士

社会調査士のことは  
専門調査士のことは

## I. 雑誌づくりに生かす 社会調査「力」

●石田晴香



石田晴香  
調査士番号：002315  
2007年3月、日本大学  
文理学部社会学科卒業  
2007年4月より、  
(株)芸文社勤務



私は、車などの趣味の雑誌を多く出す芸文社という出版社で働いている。社会調査士資格を取得するプロセスで身につけた、課題を見つけ、足と五感を駆使して調査し、社会的な文脈に即して分析する力が生きている。

ベテラン編集者の取材に初めて同行した時のことだった。車関連製品の輸入代理店で、最初は編集者の仕事ぶりにただ見惚れていたが、そのうちインタビューイの話に惹きつけられていった。日本では知られていない製品のラインナップと使い方。それらを知った嬉しさ。夢中で話すインタビューイの熱意が伝わってきた。「読者に伝えたい！」。そう思った感覚には覚えがあった。2年前、「新橋で靴磨きをする女性」にインタビューした時の光景がフラッシュバックした。

大学在学中、私は「写真で語る：「東京」の社会学」プロジェクトに取り組みゼミに所属していた（「社会調査実習」認定科目）。「東京」や「東京人」のあり様が表象された写真をもとに、「集合的写真観察法」という手法を使ってフィールドワークとチームでの議論を重ね、最終的には「写真+タイトル+400字の解説文」にして研究成果を展示発表する。

写真と文章とを効果的に使う点、見えにくいものに焦点をあてて掘り下げ可視化させる点、たえず読者を意識して表現する点などなど、雑誌の仕事と重なる部分は多い。ゼミ活動を通して習得し

たインタビューの技術や心得も、雑誌づくりにには欠かせない。

ゼミプロジェクトに携わった2年間で、私は多くのインタビューを経験した。ラジオキー局の取締役から池袋の「腐女子」まで幅広い人々にインタビューしたが、中でも印象深いのは新橋で靴磨きをする女性だった。

「おばさん」と呼んだその人は、しつこく通う得体も知れない私たちに、自分の人生を沢山語ってくれた。佐渡から上京してお屋敷で奉公したこと。戦後夫を失い子供を連れて新橋で靴磨きを始めたこと。それから55年もの間靴を磨き続けていること。その間に味わった数え切れない喜怒哀楽。「この感動を伝えたい！」。感じたことのない衝動だった。

入社して初の取材先で私の身を包んだのは、大学3年生の夏から秋に「靴磨きのおばさん」にインタビューした、あの時の気持ちだった。

未知の面白い事象、取材する過程で味わう興奮や感動。雑誌も社会学も、それぞれにふさわしい切り口ややり方がある。けれど、その枠の中でも、自分らしい視点や分析をもって思いを言葉に紡いでいけたら、と思っている。

大学時代のあの日々味わった、発見することや人に伝えることの面白さが、私の進む道を決めた。社会調査士の技と心を生かして、これからも自分を磨き続けていきたい。